

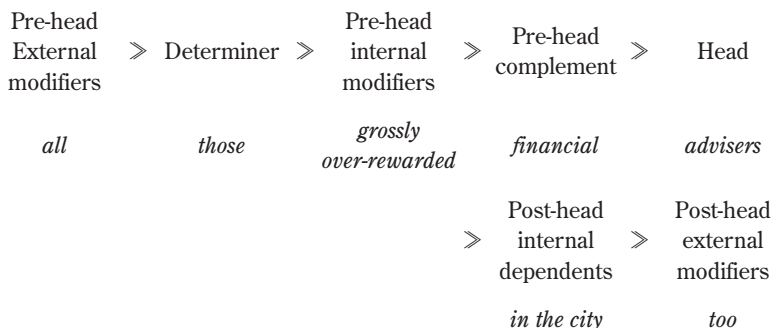
数詞修飾構造 a beautiful two weeks の 下位類について*

谷 光 生

1. はじめに

英語の名詞句内に現れる要素を機能の点から分類し、それら機能が概略どのような線形順序で現れるのかを示すと、おおよそ次のようなものとなる。

(1) 名詞句内の各機能要素の線形順序



(Huddleston and Pullum 2002 : 452)

すなわち、主要部 (head) を中心として、その左側には決定部 (determiner) などの要素が現れ、右側には主要部後位置の内依存部 (post-head internal dependent) などの要素が続くというものである。なお、ほぼ自明であろうが、上に示される各要素のすぐ下の斜体の語は、それら要素がどのような語で典型的に具現され得るのかを表したものである。

(1) の主要部前位置の内修飾部 (pre-head internal modifier) は、次の

(2) に示されるとおり、早期主要部前位置修飾部 (early pre-head modifier) と残余主要部前位置修飾部 (residual pre-head modifier) の二つの下位機能要素に分けられる。

(2) 主要部前位置の内修飾部における下位機能要素

Early pre-head modifier ≧ Residual pre-head modifier

(Huddleston and Pullum 2002 : 452)

これらの下位機能要素のうち、早期主要部前位置修飾部には、たとえば (the) two brightest (stars) のように、数詞や最上級形容詞が現れる。また、残余主要部前位置修飾部には、たとえば (the) beautiful (week) や (the) quality (product) のように評価や一般的性質などの意味を表す形容詞や名詞が現れる。

以上を踏まえると、次の (3a) が可能であるのは、(3a) に現れる各語が (1) に示される線形順序のとおりに見えているからであると言え、また (3b) が不可能であるのは、(3b) に現れる各語が (1) の線形順序を守ってはいるものの、決定部に現れる冠詞 a の表す意味と早期主要部前位置修飾部に現れる数詞 two の表す意味が矛盾をきたすためであると言える。

(3) a. (the) two beautiful weeks

b. *a two beautiful weeks

このように、英語の名詞句内に現れる要素は (1) および (2) に示される線形順序を遵守しなければならない、かつ意味的にも変則的であってはならないと言えるが、このような規定に一見反する事例も見受けられる。そのような事例の一つとして、次のような数詞修飾構造 (modified cardinal construction) を挙げることができる。¹

(4) 数詞修飾構造

a. a beautiful two weeks (Jackendoff 1977 : 129)

b. an inherently more amazing five Wimbledon titles

(Ohna 2003 : 577)

数詞修飾構造では、残余主要部前位置修飾部（たとえば (4a) の beautiful）が早期主要部前修飾部（たとえば (4a) の two）に先行しており、(1) や (2) の規定に違反したのとなっており、特異な構造が観察されると言える。さらに、冠詞（たとえば (4a) の a）と数詞（たとえば (4a) の two）が意味的にも矛盾をきたしていると言えそうで、この点でも特異である。²

以下、本稿では、数詞修飾構造に関してこれまでに指摘されてきた事実のうち、主として形式面で重要と考えられる性質を整理し、その後、同構造が形式および意味の点から少なくとも二種の下位類に分かれ得るという点に関して検討を加える。さらに、同構造はそもそもなぜそのような二種の下位類に分類され、またなぜ内部の要素に特異な順序が認められるのかなどの点についても、若干の考察を行う。

2. 数詞修飾構造の形式上の性質

本節では、数詞修飾構造の主として形式面に係わる性質を概観する。まず、前節で触れたとおり、数詞修飾構造内に現れる要素は「冠詞 > 形容詞 > 数詞」のような特徴的な順序で生起する。ただし、次の (5a) と (5b) に示されるとおり、程度詞前置 (degree fronting) や疑問詞前置のような移動操作が係わる場合は、その限りではない。

(5) a. Was there ever [*such* a two Yards of Knighthood], measur'd out by
Time, to be sold to Laughter? (Jespersen 1909-49 : MEG II, 112)b. [*How expensive* a two weeks] did you spend there?

(Hendrick 1990 : 252)

さらに、次の（６）に示されるとおり、冠詞・形容詞・数詞の三つが共起しなければならない。

- (6) a beautiful two weeks
 * a weeks
 * a beautiful two weeks
 * beautiful two weeks

ただし、次例（７）のように、形容詞の代わり、関係節が現れる場合もある。

- (7) a. We'll give you [a two weeks *that you won't believe*].

(Hendrick 1990 : 252, fn. 3)

- b. By the end of the four days, my group and I were ready to leave, but it was [a four days *that we all look back on with great memories*].

(Hendrick 1990 : 252)

数詞修飾構造が主語として機能する場合、動詞との数の一致が問題となるが、これに関しては、次の（８）のように単数で一致する場合と（９）のように複数で一致する場合の両方の可能性が観察される。

- (8) a. [An estimated 55 pence] *is* spent on packaging. (Ohna 2003 : 580)

- b. But for some local businesses [an extra 4 pence] *is* well worth fighting over. (Ohna 2003 : 580)

- c. [An estimated 43,000 people] *has* already died since 1979 due to asbestos exposure and thousands more continue every year [...].

(Maekawa 2013 : 430)

- (9) a. In 1969 alone, [an estimated 166,000 dolphins] *were* killed by Turkish

hunters, most of *them* shot. (Ohna 2003 : 580)

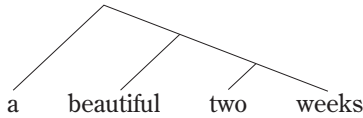
b. A surprising 70 students applied. **It is / They are* very motivated.
(Bylinina et al. 2016)

c. [An estimated 3.3 billion people] *have* died as a result of the war making it the “tragedy of modern times”, [...]. (Maekawa 2013 : 429)

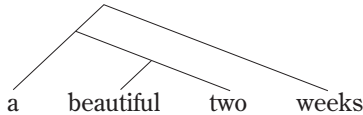
なお、(9a) と (9b) に示されるとおり、数詞修飾構造に対する代用表現として、複数形の代名詞が用いられている点に注意されたい。

数詞修飾構造は以上のような形式上の性質を持つものであるが、先行研究では、これらの性質（特に（8）と（9）に見られる数の一致の性質）のうち、何を特に重要視するかに応じて、二つの異なった統語構造が提案されている。すなわち、概略 (10) の統語構造と概略 (11) の統語構造の二つである。

(10)



(11)



(10) の統語構造では、左端の冠詞は中間投射の名詞句 beautiful two weeks に付加されたものであり、(8) におけるような動詞との数の一致は、冠詞の数により説明される。この立場を採るものとして、Ellsworth et al. (2008), Maekawa (2013), Ionin and Matushansky (2018), Dalrymple and King (2019) を挙げることができる。

一方、(11) の統語構造では、左端の冠詞は数詞に由来するものであり、(9) のような動詞との数の一致は、主要部名詞 weeks の数により説明され

る。この立場を採るものとして、Jackendoff (1977), Honda (1984), Ohna (2003) を挙げるができる。

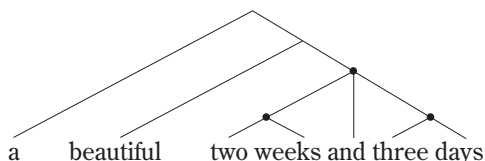
興味深いことに、上記いずれの立場に対しても、それぞれの立場をさらに支持すると考えられる事実を挙げるができる。たとえば、次の (12a) や (12a') のような等位構造に関する事実は、概略 (12b) に示されるような構造をもって説明をつけるべきと考えられるが、そうすると、この事実は (10) の統語構造を支持するものとなる。

(12) a. [a beautiful [two weeks and three days]]

(Ionin and Matushansky 2018 : 271)

a'. [a lucky [4 boys and 2 girls]] (Dalrymple and King 2019 : 493)

b.

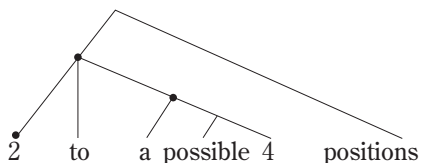


一方、(13) のような等位構造に関する事実は、概略 (13b) に示されるような構造を与えることにより、自然な説明が可能となるが、これが正しければ、この事実は (11) の統語構造を支持するものとなる。

(13) a. Applications are being accepted for [2 to a possible 4 positions] as Graduate Assistants in Athletic Training / Sports Medicine.

(Ohna 2003 : 579)

b.



(11) の統語構造を支持する事実としては、さらに次の二つを指摘することもできる。すなわち、次の (14) ように、数詞修飾構造全体が複数名詞句を要求するような環境に現れ得ること、および (15) に示されるように、数詞の要求する冠詞と同時に主要部名詞が要求する冠詞が現れる場合もあることの二つの事実である³。

(14) a. *Of* [an arbitrary 13 goods], five were more expensive [...].
(Ohna 2003 : 580)

b. [A further 50 students] *began to arrive* at the gate of the hall.
(Ohna 2003:581)

c. Then ensued *one of* [the most lively ten minutes that I can remember].
(Jespersen 1909 – 49 : MEG II, 113)

(15) a. [_{NP} The [2 to a possible 4] positions offered by the center] are only part-time jobs.
(Ohna 2003 : 583)

b. [_{NP} The [six to an estimated 18] people involved in the crime] were apparently all Japanese.
(Ohna 2003 : 583)

なお、(15) では冠詞が二つ認められるが、このように冠詞が二つ現れる場合、それらの冠詞は、次の (16) に示されるとおり、隣接してはならない。

(16) [the [(^{*}an) estimated 80] people] (Ohna 2003 : 583)

このことは Jespersen (1909 – 49 : MEG VII, 468 – 471) の言う「冠詞の衝突 (conflict between articles)」に当たる現象であると捉えられ、そうである限り、より一般的な原理や規則により説明されるべきものである。⁴

以上、数詞修飾構造が持つ形式上の性質のうち、重要と考えられるものを観察し、それらの性質を説明し得るとされる二種の統語構造 (10) と (11)

の検討を試みた。が、本節で観察した性質が (10) ないし (11) のいずれかの統語構造のみの反映であると結論づけることには明らかな無理が生じる。と言うのも、既に触れたとおり、いずれの統語構造を支持しても、その支持する統語構造では説明に困窮する事実がすぐに現れるからである。

次節では、意味上の性質を考慮すると、(10) と (11) のいずれの統語構造をも認めるべきと考えられ、また相反する事実はいずれかの構造にもとづき説明され得るという点について検討する。

3. 数詞修飾構造における二つの下位類

前節 (10) の統語構造は、(8) に示されるような単数での一致という事実を顧みると、すこぶる都合のよい構造となるが、この構造の背後では Jespersen (1909-49: *MEG II*, 108-114) の唱える「複数物の単一化 (unification of plurals)」という認知操作が働いていると考えられる。複数物の単一化とは、複数の個体を高次レベルでの一単位として概念化する操作であるが、このような認知操作を反映した例は、次に示されるとおり、枚挙に暇がない。

- (17) a. [Your toast and honey] is on the table. (Swan 2016⁴: § 130)
 b. [This gin and tonic] isn't very strong, is it? (Swan 2016⁴: § 130)
 c. [Two and two] is/are four. (Swan 2016⁴: § 129)
 d. [That ten days that we spent in Florida] *was* fantastic.
 (Huddleston and Pullum 2002: 354)
 e. [This next two miles] *isn't* going to be difficult.
 (Huddleston and Pullum 2002: 354)

複数物の単一化を反映した構造では、高次レベルでの一単位という単数に対して、動詞が単数で一致するものと考えられる。⁵

このように、ごく一般的な認知操作である複数物の単一化は、数詞修飾構

造においても認められるものと予測されるが、(8) に示される例がまさにその予測を裏付けるものとなっていると言える。すなわち、数詞修飾構造の下位類の一つとして、(10) のような統語構造を持つものが存在し、この構造においては複数物の単一化を経て、(8) のような数の一致が認められると考えられる。また、既に触れたとおり、(10) の統語構造においては、(12) のような等位構造は何ら問題を呈するものではない。

なお、このような複数物の単一化を反映した数詞修飾構造においては、(10) の統語構造に示されるとおり、冠詞は後続の要素を単一化したものの反映として機能しているため、(15) のように複数 (二つ) の冠詞が現れることはない。

一方、(11) の統語構造では、その数の一致は主要部名詞の複数性を反映したものとなっていると言え、(9) に示されるとおり、動詞は複数で一致する。この構造のもとでは、(13) のような等位構造や (14) のような複数を要求する環境は当然問題とならず、また (15) に示されるような数詞の要求する冠詞と主要部名詞の要求する冠詞の二つが同時に現れる現象も説明され得る。なお、冠詞が二つ同時に現れる場合はまれであり、多くの場合、既述のとおり、冠詞の衝突に係わる原理ないし規則により、いずれかの冠詞が消去される。

(11) の統語構造は数詞に冠詞が付加されるような構造を含むものであるが、そのような構造が果たしてどの程度の一般性を備えたものであるのかどうか、現段階では詳細は不明である。が、次の (18a) に示されるとおり、ラベル機能を持った数詞の場合には、問題となる構造がごく普通に認められ、さらに (18b) に示されるとおり、数詞自体が冠詞や冠詞相当の要素を伴っていると解される例も観察されるため、ある程度の一般性はあると言えそうである。⁶

(18) a. a size 14

b. She would be twenty-seven next birthday. But it would not be *a real*

twenty-seven; nor would Sam's forty be a real forty, like other people's twenty-sevens and forties. (Jespersen 1909-49: MEG II, 110)

以上、本節では、(10) と (11) に示される いずれの統語構造も認められるべきであるとしたが、これを換言すると、数詞修飾構造には (10) と (11) の二つの下位類が存するということになる。

次節では、数詞修飾構造に なぜそのような二つの下位類が認められるのかという点について、若干の考察を行う。また、第2節の前半で観察した性質 — 「冠詞 > 形容詞 > 数詞」という線形順序に関する性質 および 冠詞・形容詞・数詞の三つが共起しなければならないという性質 — についても、説明の方途を探る。

4. 数詞修飾構造における基本形とその変種

どのような構造、構文、規則、範疇においても、基本形とその変種が認められるが、数詞修飾構造においても同様のことが言えそうである。すなわち、数詞修飾構造は、次の (19a) のような固定表現ならびに (19b) の「another + 名詞句」が基本形となり、一定の拡張のすえ、変種として生じたと考えられる。

(19) a. a good few/many weeks

b. [Another three days] are/is going to be needed.

(Huddleston and Pullum 2002 : 354)

換言すると、(19) に見られる構造はいずれもある程度基本的なものであり、その習得は数詞修飾構造よりも早い段階で行われていると考えられるが、数詞修飾構造は基本形である (19) をもとに、派生的に文法に導入された変種であるということである。

基本形の (19) では「冠詞 > 形容詞 > 数詞」という線形順序に関する性

質および冠詞・形容詞・数詞の三つが共起しなければならないという性質が既に見て取れるが、数詞修飾構造に同等の性質が見受けられる理由は、数詞修飾構造が基本形におけるこれらの性質を受け継いだ変種であるからと言える。

また、数詞修飾構造にはなぜ二つの下位類が認められるのかという点に関しては、基本形である (19b) において、既に問題となる二つの下位類が認められ、数詞修飾構造はその性質を受け継いだからと言える。(19b) では、主要部名詞 days の数と動詞の数が一致する場合と an (other) の数と動詞の数が一致する複数物の単一化の場合の二つが認められる点に注意されたい。前者の場合においては、an + other + three の連鎖が (10) の統語構造における構成素「左端の冠詞 + 形容詞 + 数詞」への展開を促す要因となっている。

* 本稿は令和元年11月16日開催の京都女子大学英文学会2019年度年次大会において口頭発表した“A Beautiful Two Weeks and Its Kin: Variations in Form and Meaning”の一部をまとめたものである。

注

- 1 ここでの名称「数詞修飾構造」は、Ionin and Matushansky (2018) によるものである。
- 2 数詞修飾構造の左端に現れる冠詞は、不定冠詞 a (n) に限られるわけではない。次例のように定冠詞 the や指示詞 those も可能である。
 - (i) the beautiful two weeks
 - (ii) those beautiful two weeks
- 3 (14b) に現れる動詞連鎖 begin to arrive は、次に示されるとおり、その主語として複数名詞句を要求する。
 - (i) *A student began to arrive at the gate of the hall. (Ohna 2003 : 581)
 また、(14c) における数詞修飾構造は、one of に後続することから、全体が複数名詞句であることが保証される。なお、この点は複数を表す接辞 -s によって形態上 明瞭に表されているとは言いがたい。なぜなら、ここで問題となる数詞修飾構造は ten minutes というそもそも複数である名詞句を含むものであるからである。ここでの複数接辞は、ten minutes に対する複数性と同時に数詞修飾構造全体に対する高次の複数性も表していると言える。
- 4 冠詞の衝突の例として、Jespersen は a(n a) month old baby ほか、様々な実例を挙げているが、本稿との関連では a(n) (a) further one hour のような例を想起すればよいであろう。
- 5 どのような種類の複数個体が単一化されやすいのかという認知上の問題については、

今後の調査にその詳細をゆずるが、本文 (17a) と (17b) に見られるように、慣習的に一つのセットと看做されやすいものや、本文 (17c) (17d) (17e) のように何らかの尺度を示す名詞が単一化されやすいと言えそうである。

この点は、次の例に示されるとおり、尺度を表すとは考えられないような名詞が単一化がされづらいという事実と対照をなす。

- (i) Where did you find [these/*this bodies]? (Huddleston and Pullum 2002 : 354)
- 6 ラベル機能を持った数詞とは、背番号やバスの番号などがその具体例となるが、詳細は Wiese (2003) を参照されたい。

参考文献

- Bylina, Lisa, Jakub Dotlačil, and Heidi Klockmann (2016) "Adjective modification of numerals," paper presented at LogiCon, Utrecht University, 19 September 2016.
- Dalrymple, Mary and Tracy Holloway King (2019) "An amazing four doctoral dissertations," *Argumentum* 15, 490 – 303.
- Ellsworth, Michael, Russell Lee-Goldman, and Rusell Rhodes (2008) "A paradox of English determination: the construction of complex number expression," *WECOL 2008*, vol. 19, 24 – 33.
- Hendrick, Randall (1990) "Operator movement within NP," *WCCFL* 9, 249 – 261.
- Honda, Masaru (1984) "On the syntax and semantics of numerals in English," *Journal of Osaka Joguin College* 14, 97 – 115.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- Ionin, Tania and Ora Matushansky (2018) *The Syntax and Semantics of Cardinal-Containing Expression*, MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1977) *X̄-Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press.
- Jespersen, Otto (1909 – 1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, 7 vols., George Allen and Unwin.
- Keenan, Caitlin (2013) "A pleasant three days in Philadelphia: arguments for a pseudopartitive analysis," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 19, 87 – 96.
- Maekawa Takafumi (2013) "An HPSG analysis of 'a beautiful two weeks,'" *Linguistic Research* 30, 407 – 433.
- Ohna, Tsutomu (2003) "A beautiful two weeks: its syntactic structure and the semantic relations of the adjective to the numeral and head noun," *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, ed. by Shuji Chiba et al., Kaitakusya, 577 – 587.
- Swan, Michael (2016⁴) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- Solt, Stephanie (2007) "Two types of modified adjectives," paper read at International Conference on Adjectives, Lille, 13 September 2007.
- Wiese, Heike (2003) *Numbers, Language, and the Human Mind*, Cambridge University Press.